

エペソ人への手紙2章11-22節 「一つにされた恵み」

1A 近づけられた異邦人 11-13

1B 遠く離れた者 11-12

2B キリストにある者 13

2A 平和なるキリスト 14-18

1B 滅ぼされた敵意 14-16

2B 伝えられた福音 17-18

3A 主の宮 19-22

1B 同じ家族 19

2B キリスト中心の建物 20-22

本文

エペソ人への手紙 2 章を開いてください。11 節から見ていきますが、これまでの流れを思い出しましょう。神は、キリストによって私たちを贖い、ご自分のものとするご計画を持っています。1 章 10 節で、「天にあるものも地にあるものも、一切のものが、キリストにあって、一つに集められることです。」とありました。神の目的は、キリストにあってすべてのものが一つに集められることです。今の世界は、罪が入り込んでばらばらになっています。人が神から引き離され、また人々が互いに引き裂かれています。

これは、とても今の時代の大きな問題となっている内容だと思います。社会の分断、人々の孤独の問題です。これは、一人ひとりが思っていること、感じていることを尊重するだけでなく、そこに真理があるとして、だれにでも当てはまる絶対的な真理は存在しないとするとところから始まっています。それで、自分の思っていること、感じていることを、他の人たちと分かち合うことができなくなります。それで、社会は分断し、かえって非寛容になり、一人ひとりが何を思っているのかが分からないという、孤立が進行しています。教会の中にさえ、浸透しています。私一人が生活しているところが礼拝の場なのだ。他の信者との交わりは、自分の合っている人たちだけで集まればよいのだ、としています。

しかし、神はもともと、そのように考えていませんでした。神に結ばれていること、一つになっていることによって、神のかたちとして造られた私たちは生き活きとしていました。そして、同じように、神のかたちに造られたもので、人のかたわらにいる存在として女を造られました。男と女が一体になるという、一体というヘブル語は、「わたしは、ひとりの神である」と言われる時の一つと同じなのです。この一つになるということが、キリストにあって取り戻されるのを、パウロは、エペソ書で、神の贖いの働きとして解き明かしています。この時に必要なのは、キリストにあって一つな

のだということです。主は、「わたしが、道であり、真理であり、いのちです。」と言われました。キリストこそが真理であり、この方であって一つになるように、神はみこころとしておられます。

そこで、エペソ2章は、罪の中で死んでいた者たちが、キリストとともによみがえり、キリストにあって、天のところに座らせていただくということまで、神が、恵みによってしてくださいました。私たちが、キリストにあって神と一つになるよう集められたのです。そして後半部分、11節以降には、異邦人がユダヤ人から引き離されているけれども、キリストにあって一つになったのだ、という内容を見ていきます。一つにされたところの恵みであります。神に選ばれたユダヤ人と、異邦人と似間にある深刻な隔ての壁を、主がキリストにあって取り壊して下さり、一つとしてくださったという話です。2章前半部分が、縦の関係、神と人との関係でばらばらになっていたところから、一つになるという恵みがありましたが、後半部分は横の関係、人と人との間にある壁をキリストが壊され、平和をもたらすことを見ていきます。ユダヤ人と異邦人のみならず、いろいろな壁が私たちの間にありますが、キリストにあって、それらが取り壊されます。

1A 近づけられた異邦人 11-13

1B 遠く離れた者 11-12

¹¹ ですから、思い出してください。あなたがたはかつて、肉においては異邦人でした。人の手で肉に施された、いわゆる「割礼」を持つ人々からは、無割礼の者と呼ばれ、¹² そのころは、キリストから遠く離れ、イスラエルの民から除外され、約束の契約については他国人で、この世にあって望みもなく、神もない者たちでした。

パウロは、再び、神の恵みの背景である、闇の部分から語り始めます。2章1-3節で、いかに私たちが、罪と背きの中で死んでいて、悪魔のなすがままになっていて、肉の欲望で生きていて、神の御怒りを生まれながら受ける者たちだったということを話していました。ここ11-12節も同じです。神の恵みがいかに麗しく、すばらしいかを示すために、その以前の姿がいかに惨めであったのかを、このようにして描いているのです。

「ですから、思い出してください。」と言っていますから、エペソの信者たちも思い出さないといけないうほど、もう過去のものになっています。これは、良いことですね。神の恵みと祝福をいっぱいを受けていて、過去のことがどうだったのか思い出さないといけないうくらい、小さいものになっているということです。そして、その思い出さないといけないうのが、「肉においては異邦人」ということです。民族的に、血縁においてユダヤ人ではないということ、異邦人であるということでもあります。

ただ、ここの「異邦人」というのは、続けて読むと、もっと強い意味があるようです。「神の祝福を受けるようにされているイスラエルから、あなたがたは全く除外されています。」という意味合いです。「無割礼の者と呼ばれ」ていた、とあります。これは、ユダヤ人たちが、「お前たちは神の契約

から遠く離れた奴らだ」ということで、異邦人を罵る時に使っていた言い回しです。例えば、サムソンがペリシテ人の女を娶る時に、両親が、「士師 14:3 無割礼のペリシテ人から妻を迎えるとは。」と言っています。ヨナタンもペリシテ人との戦いで、「無割礼の者ども(I サム 14:6)」と言っていますし、ダビデ自身も、ゴリヤテのことを、「この無割礼のペリシテ人(17:36)」と言っています。

けれども、パウロは、「人の手で肉に施された、いわゆる「割礼」を持つ人々」とわざわざ説明しています。なぜなら、割礼は包皮の一部を切り取ることが大事なのではなくて、心の割礼、御霊による割礼を表していることが大事なのだということです。「ロマ 2:29 かえって人目に隠れたユダヤ人がユダヤ人であり、文字ではなく、御霊による心の割礼こそ割礼だからです。その人への称賛は人からではなく、神から来ます。」

次に、「キリストから遠く離れ」と言っています。イスラエルを救われる方として来られましたが、罪からの贖いとは全く関係なく生きていた、遠く離れていたということです。キリストなしに生きていた姿は、パウロは 5 章で、詳しく表現しています。異邦人の、エペソの人々の基本的な生き方です。「4:17b-19 あなたがたはもはや、異邦人がむなしい心で歩んでいるように歩んではなりません。彼らは知性において暗くなり、彼らのうちにある無知と、頑なな心のゆえに、神のいのちから遠く離れています。無感覚になった彼らは、好色に身を任せて、あらゆる不潔な行いを貪るようになっています。」アルテミス神殿を始め、あらゆる偶像礼拝を行っていました。また性的にも非常に乱れた町でありました。キリストから遠く離れていた生活を歩んでいました。

そして、「イスラエルの民から除外され、約束の契約については他国人」ということです。主は、アブラハムに約束を与えられ、その子孫であるイスラエルと契約を結ばれました。それゆえ、イスラエルには、数々の祝福の約束が与えられています。例えば、イスラエルの地が作物で豊かになり、敵からも守られるといった約束です(レビ 26:3-13)。そして、幕屋を造り、そこに祭司が入って罪の贖いを行い、主の栄光を見えるようにしてくださいという、霊的な祝福も約束されています。こういった便益と言いますでしょうか、契約の枠外に異邦人たちはいるのです。異邦人で、イスラエルの祝福にあずかるのは、例えば、カナン人のラハブの一家がいました。けれども、イスラエルの人たちと生活を共にすること、運命共同体の中に入って、初めて祝福を受けました。モアブ人のルツもそうですね、イスラエルの神を自分の神とし、ナオミの嫁として生きたから祝福を受けました。もし、そのようなイスラエルとの接点がなければ、全くの他国人であります。

そして、「この世にあって望みもなく、神もない者たちでした。」と言っています。これは、残念ですが、神などいないとして生きている多くの日本人たちの姿、もちろん世界の人たちの姿ではないでしょうか？望みがないので、生きていても生きていないようなことが起こります。一昨日、カトリック信仰を持っておられる方がバイブル・カフェにいらっやいました。ご主人がもう天に召されていますが、それでも、今、与えられている生活をベストに生きるということ、またご主人も自分を見

てくれているという望みがあります。もし、仏教だったら、そういう感覚はなかっただろうとおっしゃってました。私は思いました、もし望みがなかったら、神がいなかったら、老後の生活をこのように見ていくことが出来なかっただろう、ということです。

私たちの神は、望みの神です。「ロマ 15:13 どうか、希望の神が、信仰によるすべての喜びと平安であなたがたを満ち、聖霊の力によって希望にあふれさせてくださいますように。」ダビデは落ち込んでいる時に、「神を待ち望め。私はなおも神をほめたたえる。」と語りました(詩篇 42:11)。こうした、望みや神がない生き方を、この世で送っているということです。

ここ、日本に生きていて、私たちはある意味で、エペソと同じところにいると思います。ユダヤ人でなくとも、例えば欧米諸国は、キリスト教が背景にありますから、少しは身近なものに見えるかもしれません。イスラエルに行きましようと言っても、アメリカ人にとって壁と、日本人にとっての壁は後者がはるかに高いです。時間が取れない、お金がかかるというものさることながら、もっと心理的な壁が高いでしょう。また、数多くキリスト者がいる韓国のような国であっても、やはり、身近な存在かもしれません。けれども、日本は何もかも、イスラエルとかとは程遠い存在に見えますね。

そして、日本の中にも、自分の生い立ちから、教会の世界とは自分は程遠いと思ったことはないでしょうか？教会の壁が高いと感じることは、全く別世界で、自分は遠くにいると思ったかもしれません。このように壁を感じている人々には、大いなる恵みが次に待っています。

2B キリストにある者 13

¹³ しかし、かつては遠く離れていたあなたがたも、今ではキリスト・イエスにあつて、キリストの血によって近い者となりました。

「しかし」という接続詞が聖書に出てきたら、注目してくださいと以前にお話ししました。主が、大いなる恵みを現して、すべてを変えてしまうのです。2章前半で、4節に、「しかし、あわれみ豊かな神は・・・」とあり、罪の中に死んでいた私たちをキリストと共に生かして、天の座に座らせてくださったとありましたね。それと同じです。ここでもそうです。生まれつき盲人が、「ヨハ 9:24・・・一つのこと

は知っています。私は盲目であったのに、今は見えるということです。」と言いました。これだけの違いを、恵みがもたらします。

「今ではキリスト・イエスにあつて」と次にありますね。キリストの内にある、ということが、1章3節で、天上にあるあらゆる霊的祝福で祝福されることにあります。イエス様が、ユダヤ人の共同体から疎外されていた人々に近づかれました。取税人や遊女、らい病人、サマリア人、そして、盲人や足なえ、口のきけない人々など、引き離されていた人々のところにあえて近づかれました。

それから、「キリストの血によって」と言っていますね。1章7節で、「私たちはその血による贖い、背きの罪の赦しを受けています。」と言っていました。神との仕切りとなっていた罪を、その血によって、清められました。それゆえ、神の前に大胆に近づくことが許されました。午前礼拝で話したように、主が血を流されている時、神殿の幕が上から下に裂けました。罪によって仕切られていたものが外され、そのまま、主ご自身のおられる御座に近づくことが許されています。ヘブル10章19-22節を読んでみましょう、「19 こういうわけで、兄弟たち。私たちはイエスの血によって大胆に聖所に入ることができます。20 イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのために、この新しい生ける道を開いてくださいました。21 また私たちには、神の家を治める、この偉大な祭司がおられるのですから、22 心に血が振りかけられて、邪悪な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われ、全き信仰をもって真心から神に近づこうではありませんか。」

2A 平和なるキリスト 14-18

そして、このように近づくことができるようになった、異邦人のキリスト者であります。このことによってユダヤ人のキリスト者とも一つになれていることを話していきます。

1B 滅ぼされた敵意 14-16

¹⁴ 実に、キリストこそ私たちの平和です。キリストは私たち二つのものを一つにし、ご自分の肉において、隔ての壁である敵意を打ち壊し、^{15a} 様々な規定から成る戒めの律法を廃棄されました。

ここのパウロの言葉ですばらしいのは、キリストによって平和が来ると言っておらず、キリストこそが私たちの平和だと言っていることです。この方にあって平和があります。主がベツレヘムでお生まれになった時に、羊飼いたちに御使いが現れ、賛美をしました。「ルカ 2:14 いと高き所で、栄光が神にあるように。地の上で、平和がみこころにかなう人々にあるように。」天にある神の栄光を見て、それで地の上で、みこころに適う人たちに平和があります。キリストにある神の栄光を見ることで、互いの中に平和があるのです。私たちが、信仰をもって神の栄光をキリストにあって見る時、賛美の時に私たちに一体感が生まれるのはそのためです。東アジア青年キリスト者大会で、日本、中国、韓国、またその他の国々の若者たちと声を合わせて、三つの言語で同じ賛美をうたう時に、天国を味わうのはそのためです。キリストにある神の栄光を見ているので、平和がみこころにかなう人々に与えられます。

「キリストは私たち二つのものを一つに」するというのは、すばらしい福音です。これまで、どれほど人々が対立し、隔ての壁を造り、互いに恐れ、互いに警戒し、距離を取って来たことでしょうか。一つになろうとする時は、マウンティングを取り、自分が上位につくことによって一つになろうとしています。今ロシアが、ウクライナに「あなたがたもロシア人だ」として戦争をしにかけているのと同じです。平和ではなく、その反対、戦争が起こります。しかし、平和の君キリストが二つのものを一つにしてくださるのです。「ガラ 3:28 ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男と女もあ

りません。あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つだからです。」とあります。

ここで大事なのは、ユダヤ人がユダヤ人をやめることではありません。ギリシア人がギリシア人をやめることはありません。男がキリスト者になったら男をやめて、女のようになることではないし、女の人も同じです。しかし、キリストのうちにある者という、自分を定めるもの、アイデンティティーが出来上がったので、これらの属性、男と女の違いなどは、二の次となったのです。大切な属性ですが、それが本質ではないことを知りました。だから、真実な多様性を楽しめます。キリスト者だということが第一になります。そこにおいて完全な一致を楽しめます。そして、贖われたそれぞれの属性、民族性であったり、性別であったり、そういったものは、神の栄光を示すのに用いられます。

「ご自分の肉において、隔ての壁である敵意を打ち壊し」とあります。主がその肉体において、他民族に行われた良い業があります。そして何よりも、その肉において、罪の処罰を身代わりに受けてくださいました。それによって、それぞれにある神との隔ての壁が壊れました。それと同時に、福音の真理は、すべての人を罪人にし、すべての人がキリストを信じる信仰によって救われるようにして、そこに差別、えこひいきがないので、互いの敵意も打ち壊されるのです。

キリスト者は、イエス様から平和を造る者は幸いであり、神の子どもと呼ばれると言われていきます。キリストの弟子として生きる者は、まずユダヤ人については、神に選ばれた民であり、神が愛されているように、愛すべき民であること知っています。ユダヤ民族に対して、どんな理由があろうとも敵意を抱くのであれば、反ユダヤ主義を抱くのであれば、神のみこころを損ないます。聖書では、ユダヤ人に敵対した者は必ずその報いを受けているのを見るのです。

そして、自分が日本人であり、日本が敵対している他国の人を憎むことも、みこころを損ないます。主は、すべての民族を、アブラハムへの祝福の約束のゆえに、キリストにあって祝福しようとしておられます。ですから、私たちが一定の民族に敵愾心を持ったりするのは、キリストのみこころを損なうのです。

中国で、日本軍による収容所に抑留された英国人宣教師のことを思い出します。エリック・リデル、炎のランナーで有名になった人です。彼は中国で宣教していましたが、日本軍に捕まります。しかし、彼は敵を愛することを、収容されていた他の若い人たちに教えていました。その一人が、スティーブン・メティカフという人です。エリック・リデルは脳腫瘍で天に召されましたが、彼はその愛の炎を携えて、日本で宣教師となりました。数多くの教会を東日本、東北地方を中心に開拓していったのです。「そんなこと言っても、私は誰々人が嫌いです。」と言ったら、日本人も嫌われていたことを思い出してください。キリストの前には敵意は打ち壊されています。¹

¹ 「闇に輝くともしびを継いで—宣教師となった元日本軍捕虜の76年」いのちのことば社

その他、キリスト教は教団や教派の違いで、どれほど壁を造ってしまっていることでしょうか。自分たちがいかに正しいかを証明しようと躍起になって、他の教派の批判をすることに多くの時間を割いてきました。そうしたことで壁を造り、一つにされているキリストのからだに大きな負荷をかけているのです。

そしてパウロは、「様々な規定から成る戒めの律法を廃棄されました」と言っていますね。キリストが、律法を守られ、表面的なところではなくその精髓を守られました。神を愛し、自分自身のように隣人を愛される、ということです。そして、律法の要求する、違反したものが死ななければいけないということについて、ご自身が死なれることによって満たされたのです。ですから、キリストにあって律法が成就したのであり、残るはこの方を信じることだけなのです。

そして、午前礼拝で説明したように、ユダヤ人は律法だけでなく、それを守るための規定をいろいろ作りました。口伝律法と言いますが、その中に、自分自身を守ろうとして、かえって自分の罪の傾向を隠すために規定を造ってさえいます。例えば、両親を敬えという神の戒めがあるのに、献げ物は神のものになったとあって、扶養の義務を怠るとか、利己的な動機で律法を振りかざすことがさえできました。そうした規定で自分の身を固めたら、自分の周りには城壁のようなものができていて、周りの人たちは近づけません。そうしたユダヤ人の共同体に、メシアが来られても、異邦人が近づきようがありません。神殿には、異邦人の庭と呼ばれる外庭があり、そこからイスラエル人だけが入れる内庭があるのですが、そこに、「ここを越えたら、死んでも自己責任」というようなことを書いている標識がありました。イエス様は、それを打ち壊してくださいました。

15b こうしてキリストは、この二つをご自分において新しい一人の人に造り上げて平和を実現し、¹⁶ 二つのものを一つのからだとして、十字架によって神と和解させ、敵意を十字架によって滅ぼされました。

私たちが、キリストにあって新しく造られたということ、その新しい創造によって、これまで二つに厳しく分けられていた区別が取り除かれ、一つになりました。先に話したように、それぞれの民族性や性別や、職業の違いなど、いろいろあります。贖われる前は、それらが人と人を隔てる壁になっていましたが、今やそれらは、神の栄光を現わす特徴となっても、私たちを隔てる壁とはなりません。新しい創造にあって、一つになっているのです。こうやって平和をキリストが実現してくださいました。ところで、「新しい一人の人」「一つのからだ」と言っていますが、これが教会ですね。キリストをかしらとして、一つのからだになっています。それで新しい人と呼び、また一つのからだと呼んでいます。人間的には決して成し遂げることのできなかつたことを、一つにする力をキリストは与えられます。

そして、「十字架によって神と和解させ、敵意を十字架によって滅ぼされました。」とありますが、ま

ず、罪によって神に敵対している私たちに、神はキリストにあって和解してくださいました。次に、その和解を受け取った私たちが、互いに平和を持ちます。聖餐が、それを象徴しています。受け取ったパンは、一つのパンからです。キリストの一つのからだを受け取り、私たちが一つになっています。流された血を示す杯も、本来は一つの杯です。それを飲みかわし、私たちは一つになります。

2B 伝えられた福音 17-18

¹⁷ また、キリストは来て、遠くにいたあなたがたに平和を、また近くにいた人々にも平和を、福音として伝えられました。

エルサレムの城壁の外で、イエス様は十字架に付けられました。そしてエルサレムにいた弟子たちに聖霊が降り、そこから平和の福音が宣べ伝えられます。ユダヤ地方にいるユダヤ人が、ここでは「近くにいた人々」と言っています。そして、そこからユダヤ人たちによって他の地方にも福音が伝えられ、シリアのアンティオキアにまで届き、そしてパウロなどによって他の地域にまで福音が伝わり、そして、エペソにいる人々にも伝えられました。それが、「遠くにいたあなたがたに」ということです。近くにいても、遠くにいても、同じ福音です。

興味深いのは、使徒たちや弟子たちの福音宣教を通して、キリストが伝えてくださったということです。イエス様が言われましたね、「マタ 28:20b 見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」聖霊が来てくださり、聖霊によって、主は、福音宣教の働きをしている者たちと、いつも共にいてくださっています。

¹⁸ このキリストを通して、私たち二つのものが、一つの御霊によって御父に近づくことができます。

これは、イエス様がサマリアの女に語られたことを思い出す言葉です。サマリア人たちは、ゲリジム山というところで礼拝を献げていました。ユダヤ人たちは、エルサレムで献げています。どちらが真理なのかの疑問をサマリアの女は言いました。そこでイエス様が答えられました。「ヨハ 4:21-24 女の人よ、わたしを信じなさい。この山でもなく、エルサレムでもないところで、あなたがたが父を礼拝する時が来ます。22 救いはユダヤ人から出るのですから、わたしたちは知って礼拝していませんが、あなたがたは知らないで礼拝しています。23 しかし、まことの礼拝者たちが、御霊と真理によって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はそのような人たちを、ご自分を礼拝する者として求めておられるのです。24 神は霊ですから、神を礼拝する人は、御霊と真理によって礼拝しなければなりません。」御霊と真理によって、礼拝するのです。御霊によって新しくされた者たちは、御霊によって、また福音の真理によって神に近づきます。

ここにおいては、差別がありません。だれもが等しく近づくのです。だれかが、もっと神に近くて、

他の誰かが遠いところにあるのではないのです。パリサイ派と取税人の祈りの違いにも現れていましたね。パリサイ人は神殿の中にいましたが、取税人は遠く離れて立っていました。どちらが義と認められたかという、取税人のほうでした。彼のほうが物理的に遠くにいましたが、むしろ、そのへりくだる祈りに聖霊がともにおられて、その祈りを父なる神に届けていたのです。

私たちは、心のどこかで等級を造っています。「この人は霊的だから神にもっと近いだろう、私はそこまで霊的でないから、もっと遠いところにいる。」と思っています。そして、「その霊的な人に、いろいろなことを任せよう。その人を仲介すれば、祈りも、その他のことも神に届くから。」と。これは、明かに間違いです。その人が神に近いことは確かです。恵みよって近づけられたのです。けれども、全く同じように、あなた自身も神に近い者にされているのです！

3A 主の宮 19-22

そして、新しい一つの人にされた者たちは、異邦人も含めて、神の家族の中にはいり、神の家を構成しているのだということです。キリスト者で、自分が当事者ではないという人はだれ一人いません。誰かが教会運営をしていて、自分は見物に来ているのだ、まだ正式会員ではないのだ、というものは無いのです！それぞれが部分なのだということを、見ていきます。

1B 同じ家族 19

¹⁹ こういうわけで、あなたがたは、もはや他国人でも寄留者でもなく、聖徒たちと同じ国の民であり、神の家族なのです。

旧約時代において、イスラエルの民に律法の中で、他国人や寄留者のことが出てきます。けれども、今は、キリストにある者はそこに属していません。聖徒たちと同じ国の民です。そして、神の家族の中に入っているのです。ペテロが、第一の手紙で言いました、「Ⅰペテ 2:9-10 しかし、あなたがたは選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神のものとされた民です。それは、あなたがたを闇の中から、ご自分の驚くべき光の中に召してくださった方の栄誉を、あなたがたが告げ知らせるためです。10 あなたがたは以前は神の民ではなかったのに、今は神の民であり、あわれみを受けたことがなかったのに、今はあわれみを受けています。」

次回、3章で詳しくパウロは話しますが、これまでこのことは、はっきりとされていませんでした。明らかにされていませんでした。徐々にではありますが、明かにされてきました。イエス様が、カナンの女の娘から、彼女の信仰によって悪霊を追い出されました。アブラハムの子孫に与えられていた祝福を、異邦人にも信仰によって分かち合っておられたのです。それが今、キリストが血を流されたことによって、また御霊が降り注がれたことによって、異邦人にも十全に与えられているということなのです。

しばしば、「これは旧約時代のイスラエルに語られていることだから、私たちには当てはまらない」という人たちがいます。これは、パウロがここで言っていることに反することです。ロマ 15 章 4 節には、「かつて書かれたものはすべて、私たちが教えるために書かれました。それは、聖書が与える忍耐と励ましによって、私たちが希望を持ち続けるためです。」異邦人の信者の多い、ローマにある教会にこのことをパウロが言っているのですから、イスラエル国民にだけ語られているというのは、おかしな話なのです。

けれども、今度は、「教会こそが神の民であり、イスラエルの民はもはや神のご計画では関係のない民族になっている。」という考えもあります。これもまた、間違った考えです。先ほどのカナン人の女が言った言葉を思い出してください。小犬でも、パン屑はいただくということです。主の祝福がイスラエルの国民に約束されていますが、キリストにあつて私たちもその祝福にあずかっている、ということです。それを語っているのは、ロマ 11 章です。オリーブの木で、栽培種のオリーブの木に、野生種のオリーブの木の枝が接ぎ木された話です。異邦人なのに、信仰によってアブラハムの子孫になっているというのは、野生種のオリーブの木の枝が、栽培種のオリーブの木の幹に接ぎ木されているのと同じなのです。つまり、栽培種のオリーブの木に、同じ栽培種のオリーブの木の枝が切り取られても、容易に継ぎ合わされるのだと、パウロは論じています。イスラエルに対する約束は、そのまま残っているのです。

いずれにしても、神の贖いのご計画は、ご自分の民を一つに集めることであり、すべてのものをキリストにあつて一つに集めるというお働きを進めているのです。私たちは家族という単位が崩壊しているような世の中に生きていますが、神はこれをとつても大切にしておられます。それが復興することを願っておられます。それで、キリストにあつて神の家族を建てておられます。私たちは、神を父とし、キリストをお兄さん、長子として、私たちは互いに兄弟、また姉妹となっています。大事にしていきましょう。

2B キリスト中心の建物 20-22

²⁰ 使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられていて、キリスト・イエスご自身がその要の石です。

神の家がありますが、それは家族でもあり、また家、建物でもあります。パウロは、同じ家でも 19 節で、神の家族の話をしていますが、ここ 20 節では神の建物の話をしていきます。

まず大事なものは、土台です。「使徒たちや預言者たちという土台」とあります。聖霊によって教会が生まれましたが、彼らはまず、「使徒たちの教えを堅く守る」ということから始めました(2:42)。使徒たちには、主ご自身から直接の任命があります。彼らが、律法と預言がキリストにあつて成就したことを伝え、また教えている人々です。私たちには、今、新約聖書があるのです。旧約聖書が、

神の靈感を受けたことばであり、また新約聖書も、使徒たちの教えが書かれており、これもまた神のことばです。そして、預言者は新約時代に立てられている預言者です。使徒や預言者のことについては、4章にパウロが教えているので、その時にお話します。

ここで大事なのは、「キリスト・イエスご自身がその要の石」ということです。詩篇 118 篇の預言で、イエスご自身が引用し、使徒たちも引用した言葉がありますね。「118:22 家を建てる者たちが捨てた石それが要の石となった。」要の石とは、建物においては、その石を外したら全体が崩れるというような、要になっている石です。石で建てられている建造物は、接着剤でそれぞれが結び合わさっているのではなく、構造で互にくっついています。極端に単純にいうと、積み上げているだけです。建物には、角の隅に用いられます。そしてローマ時代、アーチには、アーチの真ん中の、曲線状のアーチの最もてっぺんの部分の石が、要石です。アーチはものすごい頑丈ですが、その石を外せば、瞬く間に崩れるのです。イエス様が、その要の石であります。使徒たちが土台を据えたのですが、それはあくまでも、あなたがたがキリストにあって生きているのだよ、ということを伝えるためであります。

²¹ このキリストにあって、建物の全体が組み合わされて成長し、主にある聖なる宮となります。

建物というのは、組み合わされているものです。幕屋においては、それが顕著であり、取り外し、組み立てやすい構造になっています。同じように、私たちは各部分であり、組み合わされているのです。また、ここでパウロは、からだのことも考えています。「成長」という言葉を使っていますが、建物が成長することはありませんね、あくまでも人体です。キリストのからだのことを考えて、成長すると言っています。エペソ 4 章では、キリストの身丈にまで成長することが書かれています。私たちが、一人でキリストのようになっていく、キリストに似た者になっていくのではなく、組み合わされて、教会としてキリストの御姿にまで成長していくのです。

そして、主にある聖なる宮となるとあります。教会として集まると、そこには聖なる御霊がおられます。そして、聖なる御霊が働かれることによって、神の栄光を見るのです。ペテロが、第一の手紙で教えました。「2:5 あなたがた自身も生ける石として霊の家に築き上げられ、神に喜ばれる霊のいけにえをイエス・キリストを通して献げる、聖なる祭司となります。」

²² あなたがたも、このキリストにあって、ともに築き上げられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。

ここが、2章における結論ですが、「あなたがたも」というところが大事です。異邦人のエペソの人たちにとって、アルテミスの神殿は身近ですが、遠くにあるエルサレムの神殿に自分たちが関わることなど、考えつきもしません。異邦人としてエルサレムに旅すれば、もし異邦人の庭からイスラエ

ル人の礼拝する区域に入るものなら、パウロがエルサレムを訪問した時に騒動が起こったように、自分の命が危ないです。事実は違うのですが、エペソ人が神殿の中に入ったと勘違いしたユダヤ人が、騒ぎ出しました(使徒 21:29)。

しかし、今、キリストにあって共に築き上げられているのです。そしてそれは石で造られた建物ではなく、御霊によって自分たちが神の御住まいとなっています。私たち自身が、神の宮なのです。私たちの内に聖霊が住んでおられるだけでなく、主の御名で集まったところには、聖霊がおられて、その礼拝を導いて下さり、私たちが霊的な祭司となり、神に仕えます。そして神の栄光をキリストにあって見えることになり、その祝福をもって、まだキリストを知らない人々に祝福と恵みを分かち合っていくのです。

ですから、私たちは大いなる恵みにいます。全く蚊帳の外にいたと思っていたところが、現場、しかも中枢に置かれたのです！私たちこそが当事者なのです！そこまでの愛を、神の愛をみなさんは受けているでしょうか？